

高等学校

平成 10 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

教育研究員名簿

No	学区	学 校 名	氏 名
1	2	都立千歳高等学校	遠山裕之
2	2	都立砧工業高等学校	鴻野 誠
3	5	都立日本橋高等学校	佐藤和博
4	6	都立深川商業高等学校	八木宏基
5	7	都立成瀬高等学校	荻原秀明
6	7	都立富士森高等学校	鎌田邦広
7	7	都立五日市高等学校	石原 剛
8	8	都立小平南高等学校	松木啓展

担当 教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 出張 吉訓

目 次

I	はじめに	1
1	研究のねらい	1
2	研究の背景と主題設定の理由	1
3	研究の進め方	1
II	調査結果から見た生徒の意識と実態	
1	感性について	2
2	主体性について	3
3	社会性について	4
III	調査結果や生徒の実態を踏まえた考察と提言	5
IV	実践事例	
1	ホームルーム活動 — 生きる力をはぐくむ文化祭指導の工夫 —	6
2	ホームルーム活動 — 年齢や就学目的が異なる集団の中で、 生かし生かされる関係を作る指導の工夫 — ...	9
3	学 校 行 事 — 教科学習との関連を図った移動教室を通して、 生きる力をはぐくむ指導の工夫 —	12
4	生 徒 会 活 動 — 文化祭運営指導を通して、 生徒会役員のリーダーシップ育成の工夫 — ...	15
5	生 徒 会 活 動 — ボランティア活動を通じ、 生きる力をはぐくむ指導の工夫 —	18
6	部 活 動 — 地域社会・異年齢集団とのかかわりを通して、 生きる力をはぐくむ指導の工夫 —	21
V	まとめ	24

研究主題

集団の中で「生かし生かされる」体験を通じ、「生きる力」をはぐくむ指導の工夫

I はじめに

1 研究のねらい

第15期中央教育審議会答申に述べられているように、教育活動の目的は生徒の「生きる力」の育成にある。この目的を達成するため、特別活動においては、感動する心、共に共感し合う心を育て（感性の涵養）、自らの意思を伝えようとする態度を培い（主体性の育成）、集団の一員としての意識を高め、よりよく問題を解決しようとする態度を培う（社会性の育成）ことが必要である。そこで、上記の課題を達成することを目指し、集団活動の指導の工夫を探る。

2 研究の背景と主題設定の理由

現在、都市化や核家族化の進行から、地域や家庭の教育力が低下し、とりわけ、多様な人間関係の中で豊かな人間性を育てる機会が減少している。その結果、生徒の中にも、自己中心的な傾向が強く、他者との協調を嫌う者や、積極性に欠け、自ら課題を発見し、それを解決しようとする意欲が不足している者が増加してきている。これと表裏する問題として、集団生活における、社会性、規範意識の欠如、「指示待ち人間」の増加、リーダーの不在といった現象も目立つようになっている。これらの原因は、特定のグループによる狭い人間関係や、広く浅い人間関係にとどまり、「仲の良い友達となら協力できる」という段階から脱することができないことにある。このことは、生徒が学校生活の中で抱く孤独感や「友達はいないけど、本音でつき合える親友はいない」という不安感、学校生活への意欲喪失、「いじめ」の発生、学業不振等の問題に対しても、大きな影響を与えていると考えられる。

本年度教育研究員は、このような問題を解決するために、集団の中で、「生かし生かされる」体験活動として、

①相互の援助協力により、自己の個性を発揮していく体験

②他者の個性や努力を正しく評価し、励まし合える体験

が不可欠であると考えた。このような体験活動の中から自他を肯定的に理解することで、生徒は本来もっている感性が涵養され、主体性と社会性を育成することができる。これは個性を伸長し、他人への思いやりや集団の一員としての意識、適切な集団運営とリーダーシップへとつながる。

そこで、特別活動におけるさまざまな場面において、生徒の感性を涵養し、主体性と社会性を育成するには、どのような指導の工夫が必要なのかを考察、研究した。

3 研究の進め方

生徒の学校活動や人間関係に対する意識調査を実施した。次に、調査結果の分析を基に、指導方法の工夫を提言としてまとめた。そして、提言を踏まえた実践事例を、ホームルーム活動・学校行事・生徒会活動・部活動について研究した。

II 調査結果から見た生徒の意識と実態

生徒の学校生活や人間関係に対する意識を調べるために、研究の柱である①感性②主体性③社会性について、7月上旬に教育研究員が勤務する8校で各学年1学級ずつアンケート調査を実施した。その結果、総数842名（1年319名、2年258名、3年265名）の回答が得られた。

1 感性について

感性を伸ばすためには感動する心が大切である。感動体験について調査した結果である。

A 今までに学校生活の中で、感動したことがあれば選んで下さい。（図1参照）
複数回答可（3つまで）

「感動体験あり」と84.4%の生徒が回答し、「ない」と15.6%の生徒が回答した。このことから、生徒は学校生活において「感動」していることが判明した。「感動体験あり」と回答した生徒の中では、「友達関係」に17.3%、「文化祭」に11.9%、「クラブ・部活動」に11.4%、「体育祭」に11.1%の生徒が回答し、人間関係や行事等が、生徒に感動を与えていることが判明した。

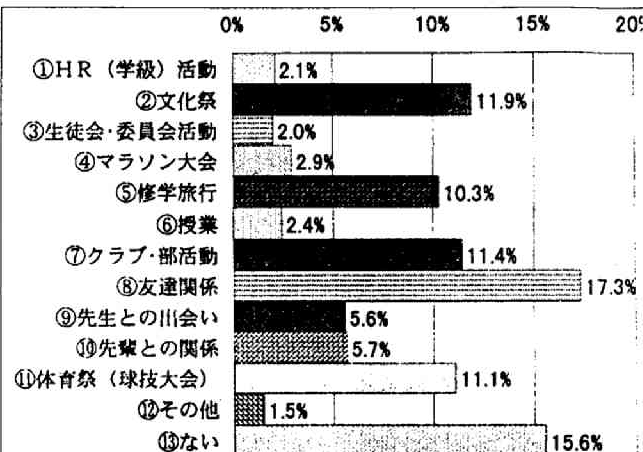


図1 A 感動したこと

B 感動した理由を一つ選んで下さい。（Aで①～⑫と答えた生徒）（図2参照）

回答項目のうち「感動した理由」として人間関係による項目（図の②③④）を回答した生徒が合計72.6%を占めており、「良好な人間関係」が感動体験に重要な意味をもつことが判明した。

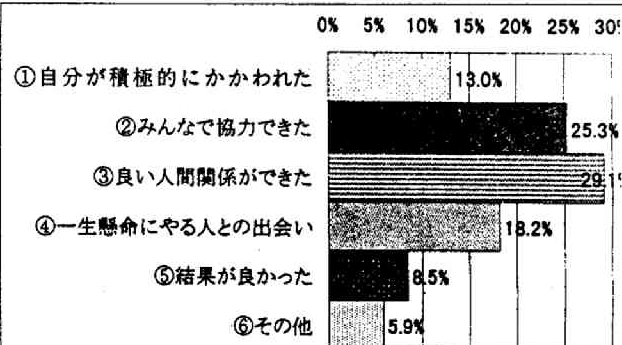


図2 B 感動した理由

C 感動できなかった理由を一つ選んで下さい。（Aで⑬と答えた生徒）（図3参照）

「感動できなかった」と回答した生徒は全体の15.6%と少数であるが、その理由として「活動の場がなかった」（17.2%）「結果がでなかった」（17.2%）と回答した生徒が目立つ。また、「その他」を回答した生徒が50.5%おり、注目すべきである。

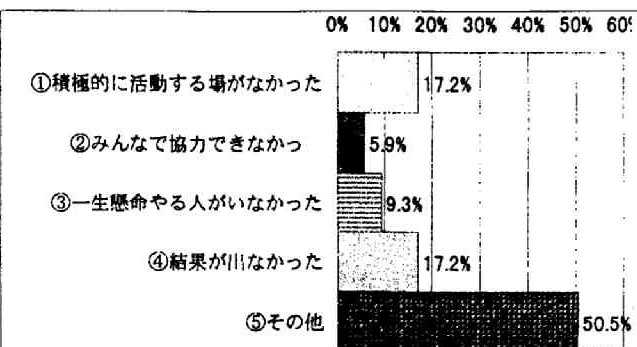


図3 C 感動できなかった理由

2 主体性について

自分の意見を素直に表現できるか。生徒の主体性について調査した結果である。

D 学校生活の中で、自分の意見を素直に出せる場面は、どんな場面ですか。(図4参照)

86.7%の生徒が何らかの形で、自己表現ができると回答した。しかし、そのうち、60.0%の生徒が「仲の良い友達」を回答しており、身近な人間関係にとどまっていることが判明した。

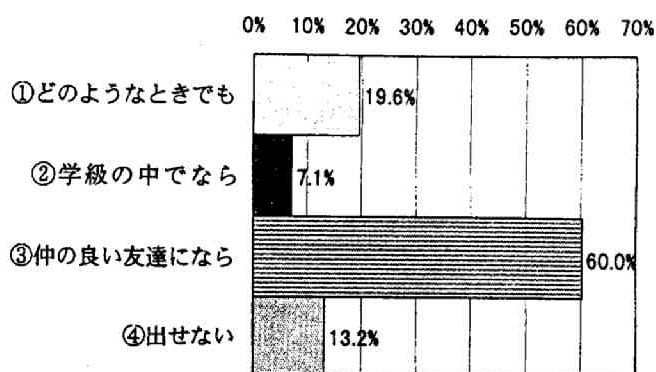


図4 D 素直に意見が出せる場面

E 素直に意見を出せた理由は何ですか。(Dで「出せた」と答えた生徒) (図5参照)

「グループが元々仲が良かった」と回答した生徒が、42.7%を占めた。次いで、「意見に自信がある」「意見を通したい」と回答した生徒が合計で41.5%を占めた。人間関係が良好であること、自信をもつこと、目的が明確なことが重要であると判明した。

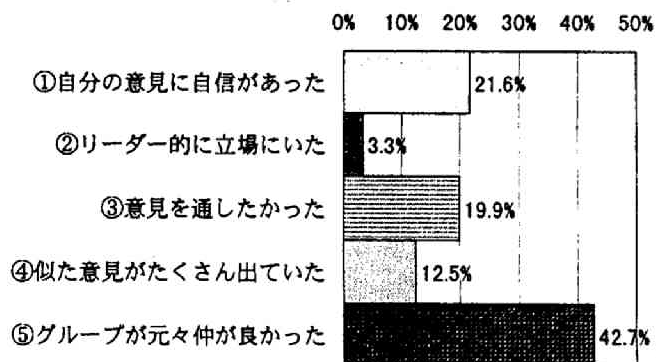


図5 E 素直に意見を出せた理由

F 素直に出せなかった理由は何ですか。(Dで「出せない」と答えた生徒) (図6参照)

「どうしても良かった」と回答した生徒が37.1%、「自信がなかった」と回答した生徒が24.3%、「対立が嫌だった」と回答した生徒が16.4%おり、自信のなさや自己本位など、生徒自身の内的な条件の影響が大きいことが判明した。

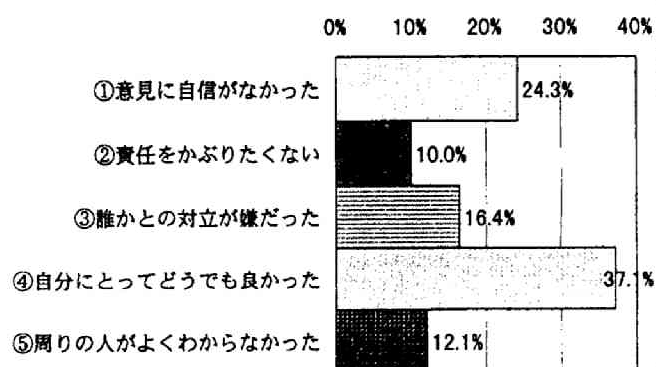


図6 F素直に意見を出せなかった理由

3 社会性について

仲間と協調する心があるのか。生徒の社会性について調査した結果である。

G 学校生活の中で協力できる場面はどんな場面ですか。

(図7 参照)

「どのような場面でも協力できる」と回答した生徒が35.2%を占め、協力する意思をもっている生徒が多いことが判明した。その一方で、「仲の良い友達」「部活動」と回答した生徒が合計39.7%を占め、協力する範囲が比較的親密な集団の枠にとどまっていることが判明した。

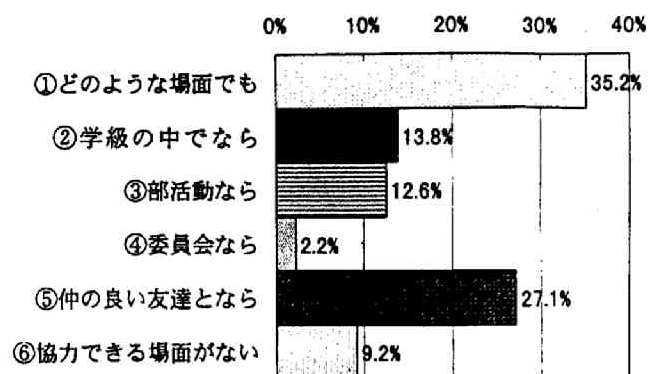


図7 G 協力できる場面

H 協力できた理由は何ですか (Gで「協力できる」と答えた生徒対象)

(図8 参照)

「力を合わせていくもの」「何事も積極的にやる」「学校生活の良い思い出」「自分のやりたいこと」(図8の①③④⑥)と回答した生徒が合計56.8%を占め、協力体制の必要性や意義を認識していることが判明した。その一方「友達とのきずな」と回答した生徒が18.3%おり、身近な人間関係を重視した協力体制になっていることも判明した。

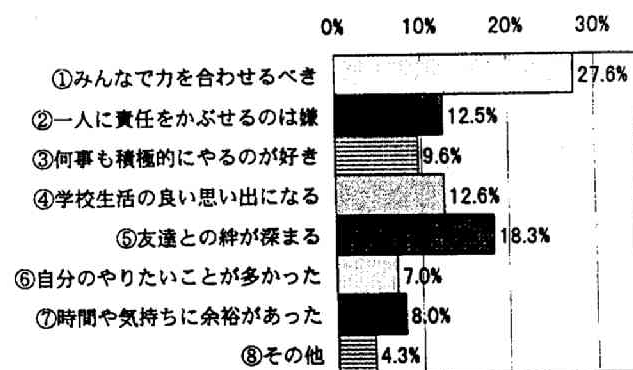


図8 H 協力できた理由

I 協力できなかった理由は何ですか (Gで「協力できない」と答えた生徒)

(図9 参照)

「興味関心がない」と回答した生徒が30.8%を占め、次いで「集団活動が嫌い」と回答した生徒が19.8%を、「大切な役割をつとめるのが嫌」と回答した生徒が9.9%であった。外的な条件よりも生徒の内的な要素が理由になっていることが判明した。

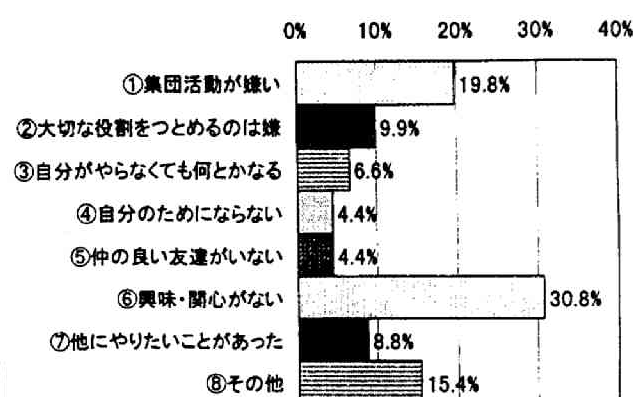


図9 I 協力できなかった理由

Ⅲ 調査結果や生徒の実態を踏まえた考察と提言

アンケートの分析結果と生徒の実態を踏まえて考察をすると、以下の3点にまとめられる。

1 「感動体験の一層の広がりには、個人レベルの対応を必要とする」

多くの生徒は、感性をはぐくむ感動体験をもっている。一方で、これまでに感動体験がなかったり、感動できないでいる生徒もいる。このため、個々の生徒の実態を把握し、より多くの活動の場を設定することや活動の結果をはっきりと認識させるなど、きめ細かな対応を行う必要がある。

2 「自分に自信がもてず、身近な人間関係の殻を破ることができない」

主体性や社会性を集団の中で発揮できない生徒は、協力体制の必要性を感じているものの、自分自身に自信がもてないなどが大きく影響していると考えられる。そのため、個性的な振る舞いや、人と違ったことをする勇気がもてなかったり、周囲に対しての信頼感や集団に対する連帯感ももちにくい傾向にある。

3 「集団への帰属意識が希薄で、主体性、社会性を十分に発揮できていない」

集団の一員としての意識が低く、他者のことを考え、思いやる気持ちが不足している。活動の経験不足から、人とのかかわり方や接し方が分からなかったり、得意でなかったりする生徒が多いと考えられる。これは、相互の援助・協力、他者の個性や努力を認め、励まし合う体験の不足などが考えられる。

以上の3点の考察から、「生きる力」をはぐくむための指導の柱を以下にまとめ提言とする。

1 感性をはぐくむ感動体験を大切にするための指導の工夫

生徒一人一人の個性や実態に応じた感動体験を基に、新たな感動体験を積み重ねていくことが大切である。感動体験においては、生徒が互いに触れ合い、支え励まし合いながら、自らを見つめ、互いに共感し、思いやりの心がはぐくまれるように配慮をするとともに、集団で活動する楽しさ方や学び方、活動の仕方を身に付けられるよう支援・援助する指導を工夫する。

2 多様な集団活動の経験の中で、肯定的自己理解をさせ、自信をもたせる指導の工夫

開かれた学校を実現し、地域との交流やボランティア活動など、多様な集団活動の機会を設定することが大切である。生徒自らが異年齢集団や校外の諸団体との連携を図り、協力して活動できるようにさまざまな状況を体験させる。それによって、自己を客観視したり、肯定的に自己理解をし、自信をもって積極的に集団活動ができるように指導を工夫する。

3 生かし生かされる体験の中で、社会性と主体性を高める指導の工夫

生徒は互いの個性や能力を認め合い、努力を褒め合うことで、集団の中での存在感や充実感をもてる。それが自信につながり、集団の一員としての自覚や責任感が生まれてくる。このことを踏まえ、他者との交流の中で、互いの個性を尊重し、生かし合いながら、協力体制を作り上げるように指導を工夫する。

IV 実践事例

1 ホームルーム活動 一生きる力をはぐくむ文化祭指導の工夫ー

(1) ねらい

本校の生徒は素直で人懐っこいが、これまでに人前で自分の考えや意見を述べたり、リーダーとしてホームルームをまとめた経験が少ない。また、狭い交友関係にとどまり、その関係も表面的な付き合いになりがちで、他のグループとの会話や交流が少ない。さらに、本研究のアンケート結果から、本校の生徒は「感動体験をしたことがない」と回答している割合が他校に比べて高い（28.4％）ことが分かった。このような社会性や感動体験の不足から、主体的に学校行事やホームルーム活動に取り組むことのできない生徒が多い。

そこで、本研究のアンケート結果から、学校生活の中で最も感動したとの回答率の高い「文化祭」を通して、生徒一人一人がホームルーム活動に積極的に取り組み、みんなで協力し合っていくことで、ホームルーム集団の中に好ましい人間関係が醸成し、生徒に「生きる力」の育成を図るための指導の工夫を行った。その際、教員は次の3点に留意して指導に当たった。

- ① 自らの役割を自覚させ、自発的な創意工夫を生かし、活動の成果を発表させること
- ② 相互理解を図り、自他の努力を認め合い、協力して活動を展開するように援助すること
- ③ 自らの成長の跡を振り返り、自己を一層伸長させようとする意欲を高めさせること

(2) 対 象 3年生 1ホームルーム 25名（男子5名、女子20名）

(3) 取り組み

表1 文化祭までの生徒の動きと指導上のポイント

本校の文化祭は、準備段階を重視し、「本物をめざす」ことを目標にしている。そのため、伝統的には演劇に取り組む傾向が強い。しかし、本事例の生徒たちは、3年生になっても演劇に興味は薄く、「つまらない文化祭」という感想をもっていた。

そこで、本事例においては、生徒の自由な発想を生かした意見を取り入れて、今までにない本物を目指し、文化祭の展示部門に「コーヒーと紅茶の研究と販売」と題して参加させた。

時 期	生 徒 の 取 り 組 み	指 導 の ポ イ ン ト
6月中旬 LHR ↓ 下旬	企画検討 アンケート→喫茶店	・どんなアイデアでも尊重する ・HR通信で話題を提供し、担任の思いを伝達する
7月上旬 LHR 下旬 登校日	企画再検討 アンケートと討論 →コーヒーと紅茶の研究と販売 研究項目と教室レイアウトの検討	・コーヒーと紅茶の専門書を購入し学習させる ・楽しい雰囲気作りをする ・イメージを膨らませられるようにする
9月上旬 LHR 中旬 休日	ティータイム コーヒーと紅茶の専門店の探検	〔専門道具街へ行く〕 ・HR通信で専門店の探検を呼び掛ける ・HR通信で話題を提供する
下旬 10月 文化祭前日 文化祭当日 文化祭後の LHR	役割分担、スケジュール調整 コーヒー班と紅茶班 研究資料の作成・ メーカーへ資料送付依頼の電話 仕入れ 準備 試飲会 感想文と反省会（紅茶で） 文化祭を題材とした一行詩	・感想文をHR通信にのせ相互理解をはかる

表1は、文化祭までの生徒の動きと教員の指導上のポイントをまとめたものである。

ア 準備段階での指導上のポイント ー楽しい雰囲気作りー

教員は、文化祭への取り組みの中に楽しい雰囲気を生み出すように心掛け指導に当たった。そのための方法として、「コーヒー・紅茶はこんなにおいしい飲み物」「コーヒー・紅茶を入れることはこんなに楽しいこと」であることに気付かせるため、ロングホームルームの時間を使って「ティータイム」と称して試飲会を開いた。また、生徒に「コーヒー・紅茶の専門店探検をしよう」と呼び掛け、専門店に行き、コーヒーや紅茶のおいしい入れ方や飲み方を研究させた。

「ティータイム」と称して試飲会を開いたことで、生徒にコーヒーと紅茶への興味・関心が生まれるとともに、生徒の嗜好からコーヒー班と紅茶班に分かれ、研究の役割分担を円滑に決めることができた。また、「コーヒー・紅茶の専門店探検」に行った生徒の中から、コーヒー豆の自家焙煎に挑戦する者が出てきたり、コージー（紅茶のポットカバー）を作ってきたり、いろいろの缶紅茶を家族で飲み、その空き缶を集めてみたり、遅くまで学校に残ってパソコンでアンケート作りをしたりと各自が創意工夫をするようになった。

これらのことから、文化祭への取り組みの中に楽しい雰囲気を作り出すことが、生徒にこれまでには見られなかった主体的な行動を生み、文化祭に積極的に取り組む姿勢を作り出すことが分かった。

また、今回は担任だけではなく、副担任に援助を頼み、教員間の協力体制の確立を図った。展示のためにコーヒー班と紅茶班に研究内容を分担したが、紅茶班を副担任に指導してもらったことで、担任と副担任が協力して、適切な指導を行うことができた。

さらに、コーヒーや紅茶の好きな教員にもアドバイスを受けるなど、多くの協力を得られた。

イ 文化祭当日での指導上のポイント ーじっと見守り、生徒の自覚を大切にー

文化祭当日は、教員は生徒を信頼するとともに、生徒が自分で学び、考え、行動するように最小限の助言を与えるだけで、生徒の自覚を大切にして、じっと見守るように心掛けた。

このことで、今まで何かあると教員に頼ってきた生徒も「〇〇さん手伝って」「私は何をすればいい?」とお互いに協力するようになり、会話のなかったグループの間にも会話が生まれるようになった。また、文化祭初日終了後、翌日当番の生徒たちが、その日コーヒー・紅茶を入れていた生徒たちに「どこを注意してやれば上手にいくか。明日のために上手な方法を教えて欲しい」と頼み、生徒たちだけの講習会が開かれた。そこには、互いに努力を認め合い、真剣に教え、教わる生徒の姿があった。



また、普段物静かな生徒が「お客さんに『ありがとうございました』と言った方がいいのかな？」と質問してきた。「どう思う？」と問い返すと「お客さんだから言ったほうがいい」と言って、元気に「ありがとうございました」と言うようになっていった。ここにも生徒の主体性と社会性をはぐくむ取り組みが見られた。

このことから、教員は、生徒一人一人が各自の役割を自覚し、主体的にさまざまな創意工夫をするとともに、生徒相互が理解を図り、努力を認め合い、協力して活動できるように、一人一人の状況を的確にとらえながら指導・助言していくことが大切であることを実感した。

(4) 生徒の感想

- ・ 今まで自分から進んで何かをやったことがなかったので、本当によくやったと思います。なにより、努力賞をもらえたことがうれしかったです。みんなで協力してもらえた賞なのですごくうれしいです。(女子)
- ・ 普段まったくと言っていいほど話さない人とも話せたり、いろいろと教えてもらえたりと交流ができたので、ホームルームで一つのことに対して努力することが、どれだけの充実を感じることができるかが分かった。(女子)
- ・ みんな一生懸命やっているのを見て、自分もこんなじゃいけないと思ってやってみた。そうすると不思議なものでだんだん楽しくなってきた。(男子)

(5) 結果と考察

当日、生徒たちは、見学者が多く来てくれて、他の企画を見る暇もない程の忙しさであった。しかし、3年間でもっとも充実感と達成感を味わった。それは、準備から当日までの生徒の様子や感想文から十分に感じ取ることができた。また、今まで進んで集団活動に取り組むことが少なかった生徒が奮起し、紅茶班の班長として積極的に行動したり、ホームルームのリーダー的存在ではあるが、自己中心的な面があった生徒が、講習会を開いてみんなをまとめたりして成長していった。

今回「コーヒーと紅茶の研究と販売」は、展示部門で「努力賞」を受賞した。これは、生徒一人一人が展示や販売などに創意工夫をし、お互いの努力を褒め合いながら協力して活動していった点が評価されたためである。

事後指導の感想文には、ほとんどの生徒が「自ら行動できた」、「交流が深められた」「充実感を味わえた」と感じており、十分に成果をあげたことができた。以前は、まとまりの足りなかったホームルームも、文化祭後は広い交友関係が生まれるなどの変化がみられている。

今回の実践で、生徒たちは、「つまらない文化祭」から脱皮し、「自ら学び、考え、行動する文化祭」を作りあげていった。そして、文化祭を通して、新たな自分を発見するとともに、相互理解を図り、「生かし、生かされる」人間関係をはぐくみ、「生きる力」を獲得していったと確信している。今後は、ホームルーム活動のあらゆる場面を通して、「生きる力」の育成をさらに高める継続的な指導の工夫が必要であると考ええる。

2 ホームルーム活動

一年齢や就学目的が異なる集団の中で、生かし生かされる関係を作る指導の工夫―

(1) ねらい

本校定時制課程には、広い年齢構成とさまざまな目的をもった生徒が入学してきている。時間的な制限があるため、担任と生徒や生徒同士で共に過ごし、共通の話題をもつ余裕がない。このため、意思の疎通を図ることが難しく、ホームルーム全体で問題解決へ向けて話し合う態度が弱い。また、目的意識がはっきりし、向学心の旺盛な生徒がいる一方で、学業や人間関係への不安などから、主体的な学校生活を送れない生徒もいる。さらに、若年齢層ほど集団への帰属願望は強いものの協働することへの煩わしさを強く抱いている。本研究の調査結果から「少人数グループの中でなら、主体性や社会性を発揮しやすい」ことが明らかになっている。そこで担任として、共に過ごす時間の確保と、人とかかわりの中で自信をもつ場面を体験させる工夫が必要であると考えた。少人数グループを積極的に活用して、生徒に集団の中で協働する楽しさ、自立と思いやりの大切さを認識させるため、次の目標を設定した。

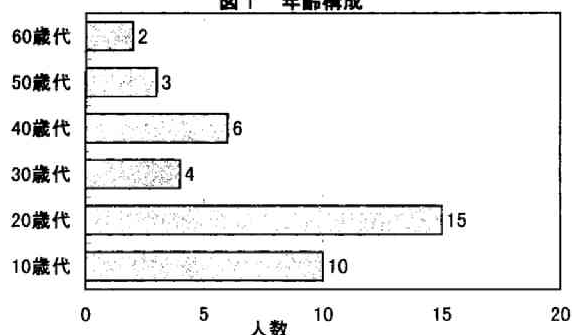
- ① 年齢差や目的の違いを超えて、主体的に人とかかわりをもてるようにさせること
- ② 生徒一人一人の能力や経験を活用し、生かし生かされる集団作りの援助をすること

(2) 対象

第1学年 40名（女性31名・男性9名）

年齢構成 17歳から67歳（図1参照）

図1 年齢構成



(3) 取り組み

生徒のもっている能力や経験を生かして、興味・関心の高い題材を取り入れた『生徒による生徒のための』ミニサークル活動を設定し、年齢差などを越えた集団の中で、他者とかかわる場面を通して豊かな人間関係を築かせる。このため、担任は教科担当などとも情報交換を行いながら、生徒が安心して取り組めるように次の観点到に留意する。

ア 生徒に精神的な負担を感じさせないよう配慮すること

イ 講師となる仲間に過大な要求や批判をしないことを原則とすること

【仲間が講師となるミニサークル活動への呼びかけ】

1学期中頃から生徒へ「ホームルーム通信の共同制作」や「得意な話題を記事にして情報誌を作ろう」などの呼びかけを通して、生徒の能力や経験の掘り起こしを行った。

① ミニサークル活動 担任主催の「陶芸教室」の実施

平常の授業日にはまとまった時間が取れず、共通する話題作りにも制限されるため、夏季休業日を利用して「陶芸教室」を2期（1期3日間）設定し、次の条件で実施した。

・参加は自由として、強制しない。 ・各自が、設定された期日に集合し、活動する。

1期では、7名程の生徒の参加であったが、2期終了後には、参加した生徒から「もっと続けてやりたい」などの声や参加できなかった生徒からの要望もあり、2学期に入り始業前や放課後に時間を融通し作業を続けることになった。また、作品十数点を文化祭に展示した。

② アンケートの実施 「人に何か教えるとしたら、何を教えられますか？」

条件や留意点を提示せずに行ったため、回答は次のような内容がほとんどであった。

・「他人に教えられるようなことはない」 ・「人に教えられよう存在ではない」

③ ミニサークル活動 生徒主催の「中国語の日常会話」講座の実施

生徒の中から「中国語で会話されていると、何か自分のことを言われているのではないかと気になる」「自分も中国語を話してみたい」などの意見があった。そこで、担任は人権に配慮しながら、中国籍の生徒に「中国語の日常会話を教えてほしい」と頼んだ。また、ホームルームの時間に「分からないことや知らないことは、人を不安にする」と話しかけ、互いに「知り合うこと」と「知り合おうと努力すること」が大切であることを説明した。そして、生徒が講師をする中国語会話サークルを実施した。最初に、講師となる生徒から自分が使っている中国語の日常会話の参考書を紹介してもらい、数人の生徒が「私たちにも参考書を買ってきてほしい」と申し出てきた。

ホームルームの時間の10分間を使って、中国語の日常会話を一つずつ習っていくことにした。第1回目は「挨拶：おはようございます」と題して実施した。ここでは、中国語が話せることをあまり強調されたくないという講師になった生徒の気持ちを踏まえながら行った。また、ホームルームの少人数グループの人間関係にも配慮して、「無理に全員を参加させない」「興味をもったらいつでも参加できる」ようにした。講師の生徒は照れながらも、楽しそうに中国語の発音を教えた。参加した生徒の中には興味深げにノートを取る者もいた。その後、回を重ねる毎に、生徒相互の交流を深めるきっかけとなった。



また、担任が「他にどのような国の言葉を知りたい？」と問い掛けると、生徒の一人から「英語をやりたい」という返答があり、担任と生徒で3カ国語の対応表を作り、教室に掲示することになった。

④ 文化祭への参加 「陶芸作品」「趣味の一品」「なんでも一言」の出展

生徒が相互理解を深めるために文化祭参加を活用し、個々の趣味や日ごろ抱いている思いを自由に表現させた。作詞・手芸などの幅広い趣味や身体に障害の残った事故体験等を発表し、生徒一人一人の能力や経験を掘り起こすことができ、展示部門で優秀賞に評価された。

⑤ アンケートの実施 「出展の感想」「人に教えられること」「教えてほしいこと」

④の実践を通して「十分に、評価されるものをもっている」ことを前提とし、自己を再評価させるとともに、どのような能力や経験をもった仲間と生活しているのか気付かせるために、次の提案をして、再度アンケートを実施した。

・個々のもっている能力を生かして、互いに教え合う機会をつくろう。

(4) 結果と考察

当初、生徒はミニサークル活動への呼びかけにあまり反応もなく、遠慮している様子であった。そこで、担任による陶芸教室を実践する中で、年配の生徒から自分の若い頃の話が聞けるなど、共に過ごす時間の中で会話が生まれ、気心が知れていくことが実感できた。

最初のアンケートでは、前提条件として「互いを批判しないこと」を提示しなかったため、これまでに正当な評価を受ける経験が少なく、自信のもてない生徒や教科の学習で手いっぱい、他の活動まで手が回らない生徒など、生徒の消極的な反応がみられた。

これらのことから、生徒には物事をやらされていると感じさせない配慮が必要である。そのためには、主体的に集団活動を楽しみ、経験をさらに積み重ね、負担感を超越した“楽しい”という動機付けが生まれるように継続的な取り組みが大切である。

2度目のアンケートからは、次のような回答が得られた。

〔文化祭展示の感想〕

- ・ 仲間がどういう趣味をもっているかが分かった。個々の性格や人柄も見えた。
- ・ 私は気持ちの優しい、元気で欲張りな人たちといることを嬉しく思い、学校に来る楽しみが増した。
- ・ 時間がない割には、皆でてきぱきと行動したのでバランスがよく多種多様で良かった。

〔教えられること〕

- ・ 楽しい山歩き ・ 教わることばかり

〔教えてほしいこと〕

- ・ 外国の言葉 ・ 編み物 ・ 私の明日 ・ 人との接し方 ・ ペーパークラフト
- ・ やってみたいことを教えてくれる人がいたら、時間の許す範囲でやってみたい。

年齢や就学目的の異なる集団である同級生の考えを聞いたり、自分を表現したりすることで、生徒の中には、積極的にあるいは消極的ではあるが、人とかかわろうとする姿勢が生まれてきた。しかし、依然、人付き合いに戸惑っている生徒や傍観している生徒もいる。このような生徒には、学校生活のあらゆる場面で、意図的な場面設定を工夫し、集団の一員としての意識を高めることが必要である。

中国語講座では、「さまざまな国の人間が集っているホームルームはあまりない」「自分たちの置かれている環境は恵まれている」などの意見が出てきた。また、「他国の言語を知ろう」「異文化を知ろう」など、互いを知り合うことへの意欲が高まった。このことから、生徒一人一人の能力や経験を活用することで、「生かし生かされる」集団を生み出し、豊かな人間関係が築かれることが分かった。

今回講師を経験した生徒や教わった生徒の中から、ミニサークル活動は、共に過ごす時間に制限があり、心理的余裕がない状況の中で、主体的に人とかかわりをもたせる機会として有効であることが分かった。今後は、担任主導から生徒主導へ移行し、生徒が主体的に活動していることを実感できるように工夫する必要がある。そして、生徒たちの中からさまざまなミニサークル活動が生まれ、これらが同好会や部活動など学校全体の活動へと拡大していくように工夫していくことが大切である。

3 学校行事

－教科学習との関連を図った移動教室を通して、生きる力をはぐくむ指導の工夫－

(1) ねらい

今日の生徒の状況をみると、集団への帰属意識が薄れ、日々の学校生活においても意欲の欠如や相互の協力関係が希薄であったり、自主的な取り組みができない生徒が増えている。それは、相互の精神的つながりや過去の成功体験が少なかったり、学校生活の中で、自分のよい面や持ち味を十分に認識できていなかったり、また、学習においても学び方が分からなかったりなど、さまざまな要因による。

本事例では、今日の生徒に主体的にたくましく生きる力を育成するためには、多様な場面でのアプローチが必要であると考えた。それには、教科学習との連携を図った旅行・宿泊行事を通し、平素と異なる生活環境にあって、共に見聞を広める中で、望ましい人間関係をつくることが有効と考えた。以上のことを踏まえ、本校で毎年実施されている移動教室の中で、次の3点をねらいに設定し、学年の取り組みとして実践を行った。

- ① 生徒相互の精神的つながりを図るとともに、集団への帰属意識を高めること
- ② 集団活動の中で、生徒一人一人のよさを認め、成功体験を支援すること
- ③ 教科学習との関連を図った集団活動の体験を通して、自主的な学習態度を養うこと

(2) 対 象 1年生 1ホームルーム（40名）単位で6回実施

(3) 方 法

多様な場面を通して生徒相互の精神的つながりを図るために、複数の教科・科目（地理・生物・国語）の協力を得て、2泊3日のホームルーム活動と教科学習との連携を図った「移動教室」を5月に実施した。生徒には、3日間の集団活動の中で所期のねらいを達成させた。

ア 行程・内容の決定

【春季休業に入る前までの取り組み】

- ① 新学年団が決定後、学年団から教科担当者へ協力を依頼する。次に、協力科目（地理・生物・国語）の担当者と学年団で、双方の考えを出し合って、行程を検討し、決定する。
- ② 行程に合わせて、教科担当者が各協力科目ごとに生徒が行き先の自然・文化などに親しみ、見聞を広めることのできる課題を設定する。

【新学期から出発までの取り組み】

- ③ 生徒への周知は、ホームルームの時間と該当科目の授業で行う。ホームルームの時間では、実施の目的・班分け・諸注意などを中心に行い、該当科目の授業では行き先の自然や文化の事前学習や課題の解説を中心に行う。
- ④ 学年団の移動教室係が中心となって、教科担当者の協力を得ながら下見を行い、指導計画を作成し、全体のしおりを発注する。

【行程の一例】

＜第1日目＞新宿西口出発－丸木美術館－桐生織物参考館－（昼食）－富弘美術館－足尾ダム－学校山荘－植物採集－（夕食）－学習

＜第2日目＞学校山荘－奥岳－薬師岳・・・安達太良山山頂・・・くろがね小屋（昼食）・・・奥岳－岳温泉（軒並調査）－学校山荘－（夕食）－ホームルーム活動

＜第3日目＞学校山荘－智恵子の生家・記念館－五色沼散策－（昼食）－新宿西口到着
注1） 第1日目と第3日目は、生徒は事前に与えられた発表項目をバス内で1人ずつ解説をする。

注2） 下線部分は見学だけでなく体験的な学習を行う。

イ 事前学習

- ① 移動教室中のホームルーム活動の内容は、文化祭の出し物の検討を含め、ホームルームごとに生徒達の話し合いを通して決定させる。協力科目の課題については、生徒の興味・関心に合わせ、事前に複数設定された課題の中からグループ課題と個人課題をそれぞれ選択させ、共通の課題に取り組ませることで相互の精神的つながりを図る。
- ② ホームルームで、生徒の係分担を決定し、ホームルームのしおりを作成させる。
- ③ 該当科目の授業では行き先の自然や文化をグループや個人で調べ、バス内発表原稿とその他の事前提出物を作成させる。

○ 留意事項

- ・ ホームルームでの話合いや協力科目の課題の作業をする中で、一人一人の良いところを見つける努力をさせる。
- ・ 協力科目の課題では、調査形式などを工夫して、互いに励まし励まされる場面ができるようにする。

【教科（地理）の課題の例】

75万分の1コース図の作成
「二本松」土地利用図の作成
バス内発表内容の作成

ウ 実施中の体制

- ① ホームルーム担任と教科担当者及び生活指導担当者の計3名の引率教員で役割を分担し、相互に協力して進める。
- ② ホームルーム担任は、開校式・閉校式、ホームルーム活動、見学場所との交渉及び集合時間・場所などの指示を担当する。
- ③ 教科担当者は、生徒のバス内発表を促し、発表へのコメントと行き先の解説を行う。また、夕食後の学習指導の指示を与える。
- ④ 生活指導担当者は、登山の支援をするとともに、ラジオ体操、食事の用意や清掃、その他生活指導全般を指導する。
- ⑤ バス内発表の評価は引率教員3名で行う。

○ 留意事項

- ・ リーダーシップの発揮や、取り組みの成果などを積極的に褒め、集団生活上のさまざまなチャンスをとらえて生徒を励まし、指導・助言を行うよう心がける。

- ・ 登山、散策ではグループごとに弱い者の立場にたって行動させ、できるかぎり励まし励まされる場面をつくるよう努力をする。
- ・ 文化祭の出し物の話し合いでは、移動教室中に学んだことをもとに考えさせ、教科との連携を図る。
- ・ 安達太良山登山や五色沼散策では、安全面に特に気を付けるとともに、教科の課題作成のポイントを指示する。
- ・ 他人の発表を記録させ、互いの良いところを評価し合えるようにする。
- ・ 課題への取り組みを通し、達成感をつかめるように配慮する（写真右下の解説にあるように、記録させながら散策させ、歩き終わると記録ができあがるワークシートを持たせた）。



五色沼では各沼の説明板の内容を記録し、pH検査をしながら散策する。

エ 事後学習

- ① 文化祭の出し物の企画書を作成し、今後の進め方を検討させる。
 - ② 移動教室を通して調べたことをまとめて、(a) レポートを作成（地理）、(b) 模造紙上に共同研究の成果を発表（生物）、(c) 移動教室をめぐる“感動”を詩や短歌で表現（国語）させ、自然や文化、地域社会への関心と理解を深めさせる。これらは、文化祭や学校説明会に学年行事の記録として展示紹介したり、記録文集を作成したりする。
- 留意事項
- ・ 生かし生かされた場面を思い起させ、相互の精神的つながりが図れたかを考えさせる。

(4) 結果と考察

生徒の感想や実施後の様子から、移動教室を通して次のような変化がみられた。

- ① 教員の指導のもと、文化祭の出し物の準備のために生徒たち自身でホームルーム合宿を企画するなど、実施前に比べホームルームの人間関係が深まり、連帯感も高まった。
- ② 「いろいろな体験ができた」などという感想があり、課題を解決するうえで多様な場面が設定できた。特に、登山などでは互いに励まし合って、ペースが遅い生徒を生徒同士で気遣うなど「生かし生かされる」場面が形成されやすかった。また、「勉強は大変だったが、達成感があった」という感想もあり、意欲を喚起された生徒も多かった。
- ③ 日常の活動においても積極的に協力関係をつくって、自主的に取り組むようになった。
- ④ 教員も3人で指導することにより生徒に対する見方が広がり、多面的な指導ができた。この実践から、集団活動において、教科学習との連携を図り、生徒が自ら達成感をもち、一人一人のよさを認め合う場面が多様に設定できれば、生徒の主体性や社会性が効果的にはぐくまれることが分かった。また、自主的な学習態度を養うことや、相互の精神的つながりを深めることも実証された。今後は、この結果を踏まえ、継続的に生徒の主体性や社会性を伸ばしていく体制づくりが必要である。

4 生徒会活動 ―文化祭運営指導を通して、生徒会役員のリーダーシップ育成の工夫―

(1) ねらい

本校の生徒会役員は、例年5月に選出された1・2年生で構成されている（任期1年。再選可）。生徒からの立候補は少なく、毎年、担任団等教員の指導により定員を満たしている。選挙も「信任」投票となっている。このため、選出された役員が、いきなり主体性やリーダーシップを発揮して、生徒会活動を興隆させることを期待することは難しい。

そこで、生徒会活動を通して生徒たちに意欲を育て、早急に主体性と社会性の育成を促す中で、役員としてのリーダーシップを育成したいと考え、次の3点をねらいとした。

- ① 生徒会役員が文化祭の運営に向けて、それぞれの役割を分担し、計画を立てて主体的に実践するとともに、その結果を成功体験に結び付ける。
- ② 生徒会活動の中で自他を肯定的に理解するとともに、互いに支え合える関係を実感する。
- ③ 「生かし生かされる」体験を通じて、主体性と社会性をはぐくみ、リーダーとして行動しようとする態度を身に付ける。

(2) 対 象 生徒会役員 13名（1年生5名、2年生8名）

(3) 方 法

9月下旬の文化祭に向けての企画・運営を表1にしたがって実施する。その過程の中で担当教員と生徒会役員との『面談』、生徒会役員による『準備状況報告会』を行う。

表1 指導計画

実施時期	生徒会役員の活動	教員の指導・援助
5月	○新年度を迎え、生徒会役員としての1年間の活動目標を設定する。 ○お互いを知り、友人関係を作り出す。	○全校生徒へのアンケートの実施を実施させ、生徒の代表という意識を強化する。 ○定例会を設け、定期的な交流の機会を用意する。
7月	○生徒会役員・文化祭実行委員でなくとも、「やってみたい・手伝いたい」という気持ちのある生徒を集めてリーダー研修会を実施する。 ○文化祭に必要な役割を決め、その役割をやりたい生徒がグループとなってその役割を担当する。	○役員・委員以外の有志参加を認め、既にある友人関係を基礎に活動させる。 ○役割ごとに「やる気」のある生徒を集めさせ、そこに指導教員を配置する体制を整え、生徒の主体的な活動を尊重するとともに、他人との協調を促しながらグループとして活動できるよう配慮する。
夏季休業中	○担当ごとに、それぞれ計画を立てて活動する。 (活動計画は生徒会役員が管理し、連絡・調整にあたる)	○活動計画の立案・実施において、クラス活動や部活動等との両立、個人の都合ができるだけ配慮されるよう指導する。
9月初旬	○教員との面談を通じて、自分の気持ちも向き合うとともに、自分自身の成長を実感する。	○できるだけ時間をかけ、気軽な雰囲気の中で生徒の心情的傾聴し、励ます。 ○必要なら、他の教員の協力を得ながら支援策を用意する。
9月中旬	○準備状況報告会を実施する。 ○報告された成果には感謝や賞賛を、課題や悩みに対しては代案や援助を示し、非難や責任の押し付け合いはしない。	○メッセージカード（参考1）を活用し、事前指導を十分に実施する。 ○報告会のために十分な時間を用意し、余裕のある議事進行を指導する。 ○司会者を支援し、参加者の連帯感を深め、相互協力態勢の構築を支援する。
当 日	○生徒会室を本部とし、生徒同士が相談し合い、協力し合う。 ○生徒全員で生徒会役員の努力に感謝する。	○生徒会役員のこれまでの努力を、教員がそれぞれの立場で賞賛する体制を作る。 ○文化祭実行委員に指示し、一般生徒が生徒会役員に感謝する企画を用意させる。
10月上旬	○事後学習会を実施する。	○生徒会役員に自己の成長を確認させ、今後の活動に意欲と展望を持たせる。

ア 面談の実施

<目 的>

- ① 立候補時の初心を思い出させる。
- ② これまでの活動の過程で達成・成長した点に気付かせる。
- ③ 課題に気付かせ、見通しをもたせる。

<指導の工夫>

- ① 個人面談とし、最低20分は実施できるよう準備をする。
- ② 生徒用の席を3つ（机を挟んだ正面・斜め横・側面）用意し、生徒に選択させる。
- ③ 生徒の悩みや不満等を傾聴し、支援する。

生徒の感想

- ・思っていたこと、何となくモヤモヤしていたことが言葉になった。
- ・違うタイプの人と、もっと仲良くなろうとしていなかったことに気付いた。
- ・自分の長所は、だれかにほめられたときに気が付くことが、今日、初めて分かった。
- ・今の自分を変えたいのか、変えたくないのか分からなくなった。考えたい。

イ 準備状況報告会の実施

<目的>

- ① 生徒会役員及び、文化祭実行委員相互の連帯感を深め、豊かな人間関係を築く。
- ② 努力した点を互いに認め合う中で、生きがいを見出し、自己の存在感を実感する。
- ③ 協力の大切さを理解させるとともに、積極的に他を援助しようとする態度を育てる。

<指導の工夫>

- ① メッセージカード（図1）を活用し、互いの努力した点を互いに認め合う雰囲気を生み出し、準備状況報告会が円滑に実施できるようにする。
- ② 準備状況報告会の実施にあたっては、十分な時間を確保し、「互いの努力を評価する」「すすんで相互に援助し合う」姿勢を育てる。

A メッセージカードの活用

- ① 教員があらかじめ文章の印刷された「感謝状」や自由にメッセージを記述できる様式のカード等のメッセージカードを用意する。
- ② これらのメッセージカードを何枚使うか、また、誰に贈るかは生徒の意思に任せる。
「仲間の活動をよく思い出して、感謝と賞賛を贈る」こと、「なるべく大勢の仲間にカードを贈ろう」と助言する。
- ③ 完成したメッセージカードは、必ず教員が見て、人権上の配慮を行ってから生徒に渡す。
- ④ メッセージカードが少ない生徒には、教員から励ましと今後の活動への助言を行う。

図1 メッセージカード

<u>S 君・さんへ</u> 先生はいつも優しく、いろいろ (1年生)と話を聞いてくれて、 いつも先生の近くにいると、 いろいろのアドバイスをもらって、 頑張ろう。 U より	<u>H 君・さんへ</u> いつも優しく、いろいろと 話を聞いてくれて、 いつも先生の近くにいると、 いろいろのアドバイスをもらって、 頑張ろう。 O より	感謝状 <u>S 様</u> あなたは、 あなたのために、頑張る仕事を して下さいました。感謝の気持ちを 送ります。 S より
---	---	--

B 準備状況報告会への配慮事項

- ① 実施日時を文化祭 1 週間前の土曜日午後とし、その日、各担当の活動は休止させ、十分な時間を確保することで、気持ちを報告会に集中させる。
- ② 各担当者は、まず「達成できたこと」を報告し、他の生徒には、「達成」に対する感謝と賞賛をさせる。
- ③ 次いで、各担当者に、「遅れている部分」とその原因や悩みを説明させ、他の生徒には、「原因と悩み」を解決するための代案と援助できることを提案させる。
- ④ 各担当ごとに「これから努力すること」を整理させる。そして、「自分たちの努力だけでは心配なこと」に関しては、援助体制に不備がないか、参加者全員で確認させる。

生徒の感想

- ・自分が頑張っていることが分かった。
- ・困っていることを困っていると言えた。(言っちゃいけないと思っていた。)
- ・あまり仲良くなかった A さんが、自分のことを見ていてくれたのが驚きだった。
- ・B 君がこんなに頑張っているんだから、自分も、もっと頑張れると思った。
- ・みんなも忙しいのに、「少しでいいなら、手伝ってあげる」と言われて、感動した。

(4) 結果と考察

本研究は、活動期間を、夏季休業中までを「人間関係の出会いの時」、9 月から文化祭当日までを「人間関係の殻を破る時」、文化祭終了から事後学習までを「活動が思い出になる時」の 3 期に分けて実践計画を作成した。(表 1 参照)

① 人間関係の出会いの時

活動に際して、役員の友達も参加させ、すぐに多様な個性との交流を求めず、ゆとりをもって仲間を発見させた。生徒からは、概ね「楽しい」という反応が返ってきた。

② 人間関係の殻を破る時

リーダーシップの発揮が苦手な生徒たちを支援する目的で実施した面談から、「褒められることの大切さ」が判明した。生徒自身は「当たり前」ということを、教員が「きちんと」「上手に」褒めるとともに、生徒同士が「互いの個性の認め合い、努力に対して正当に評価し合う」機会を与えることの重要性が確認された。

準備状況報告会では、当初、「この忙しい時期に時間がもったいない」という反応もあった。しかし、討議が進み、「悩み」に対する援助や提案が繰り返されていく中で、生徒たちの中に連帯感が育っていった。報告会は、生徒会長の「困ったことが起きたら、お互いすぐに相談しよう」という発言で締めくくられた。

③ 活動が思い出になる時

「あの時の自分に反省」「良い思い出」という発言にとどまり、「成長」という趣旨の発言は少なく、また、リーダーシップが発揮できた理由も、「立場」「状況」という外的な条件に遭遇したからと認識し、自己の成長という認識は低かった。「良い思い出にできた自分を成長と捉え、新たな目標をめざす」ためには、教員の指導とともに、生徒相互が他者の個性や努力を正しく評価し、励まし合う機会を与えることが必要であると判明した。

5 生徒会活動ーボランティア活動を通じ、生きる力をはぐくむ指導の工夫ー

(1) ねらい

本校の生徒会活動は「何をすればいいのか」「何ができるのか」を考え、生徒会組織の在り方について模索している。また、役員構成が、居場所を求めて集まってきた集りである場合もあり、全般的に活動は低迷している。生徒会役員会で、担当教員が「今年は違うぞ」「新しい取り組みをしよう」と指導し、具体的かつ短期的な目標を与えることで、生徒たちは、新しい試みを考え、予想以上の成果を挙げることがある。そこで、生徒会活動の活性化を図るために以下の具体的なねらいを設定した。

- ① 国際貢献ボランティアを通して「生かし生かされる」経験をさせること
- ② 定例会の話し合いで「短期的な目標」を設定し、活動の中で成功体験をさせること
- ③ 定例会の話し合いの内容を議事録に記入させ、次年度のマニュアルとして活用させること

表1 活動経過と短期的な目標

(2) 対象

生徒会役員と有志
10人～18人

(3) 方法

創立20周年記念行事の一環として、学校内の身近な問題を取り上げ、やりがいのある高校生らしい活動、社会に貢献できる活動を話し合い、国際貢献ボランティア活動に取り組むことに決定した。支援団体を選ぶに当たってインターネットを利用して、NGO ジャパン・マザーランドアカデミーを通して支援を行うことに決定した。

	活動経過	短期的な目標
6月	・生徒会執行部でボランティアを行うことに決定 ・生徒会機関誌「Window」で公募 ・10名の参加で発足 ・定例会、係り分担、ボランティア団体の研究、資料集め（インターネットを活用） ・5団体に絞りアクセス ・NGO マザーランドアカデミーに決める ・「ボランティアチームどらえもん」機関誌を「なんでもドア」と名付ける ・出版社に許可願いを出す ・PTA 総会で趣旨説明協力要請する ・手作り T シャツ（シルク印刷・コンピュータ転写） ・コンピュータ転写紙を販売元に無償提供要請	・公募 ・資料集め ・団体とアクセス ・決定 ・名前を決め ・許可願い ・PTA に協力 ・デザイン作成 ・要請
7月	・JVC 本部訪問、文化祭用の資料を予約する ・マザーランドアカデミー訪問、荷積作業、物資仕分け梱包など体験する	・訪問資料集め ・訪問体験
8月	・文化祭展示物作成 ・バザー用オリジナル T シャツ作成 120 枚 ・バン格拉ディッシュの工芸品	・準備 ・手作り
9月	・バザー用品受付開始 ・ネグロスバナナ発注 ・マスコミにアクセス ・文化祭出展 ・段ボールの調達 ・外部から物資が届き梱包作業中止	・バザー用 ・宣伝 ・スーパーマーケットへ
10月	・10月の物資運搬を中止 11月23日に決める ・外部から物資が届く ・物資の仕訳作業	・物資仕分け
11月	・20周年記念で報告 ・段ボールに梱包 38箱	・報告 ・梱包
12月	・23日、品川埠頭で船積み作業（パレット積み） ・文化祭、バザーでの収益金を募金（植林175本）	・船積み作業
1月	・関係各方面へ報告 ・活動のまとめ	・報告 ・まとめ
2月	・「なんでもドア」で活動報告 ・生徒会で継続することを決める	・機関誌で報告 ・継続する

校内から有志を募り、生徒会役員と合わせてチームを結成し、名前を「夢の実現」などの発想から「ドラエもん」とし、機関誌を「なんでもドア」とした。呼称の使用は出版社と話し合い許可をもらった。(図1. 2) 毎週の定例会で、PTAにも参加を要請することになり、代表者がPTA役員会に出席し趣旨説明を行った。

資料集めに、JVC本部を訪問し、南北格差の問題、食糧問題、自活の問題、現地で活動してきたスタッフの話进行参考に、写真や本など文化祭に必要な資料を予約した。

夏期休業中

物資の仕分けと梱包作業の体験を行った。

文化祭当日の活動を校内から地域に広げることを話し合い、新聞社に取材を要請した。

文化祭当日

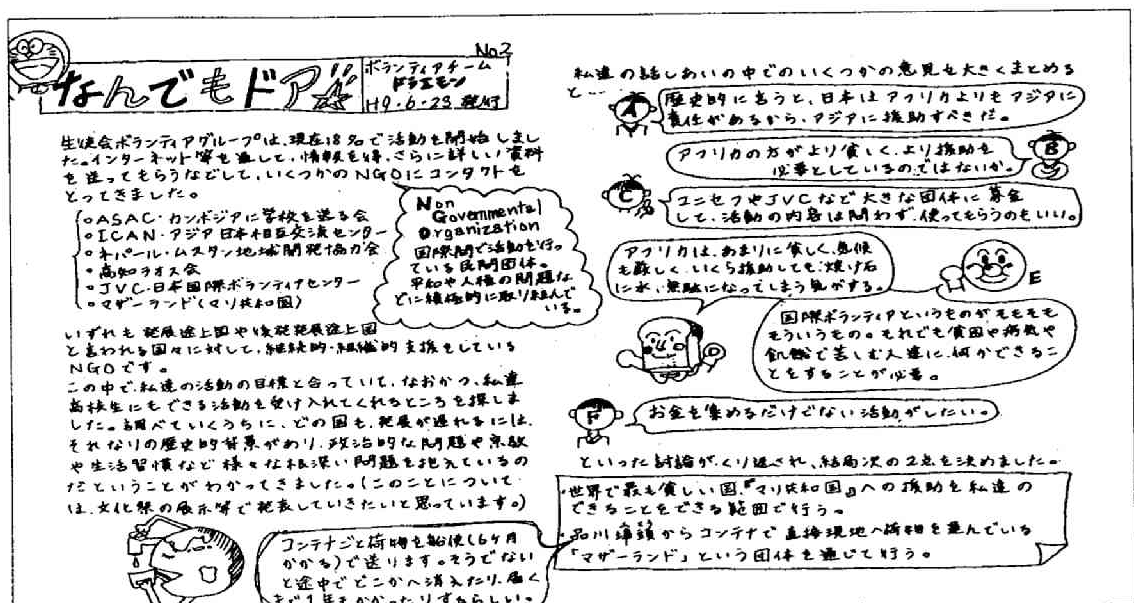
展示とバザーの出展をした(図1)。新聞社が文化祭当日取材に来て、地域版に掲載された。

文化祭後

物資の整理を始めるが、新聞記事を読んだ地域の方から続々と物資が届いた。

段ボール38箱に詰めた物資を担当者の車で品川埠頭へ運び、時折小雪が降る中、生徒会役員と有志はパレットに段ボールを積み、ビニールでカバーをするなど、荷積みの作業をした。文化祭の売上金とバザー売上金は、全額植林募金にあてた(写真1)。

図2 機関紙「なんでもドア」



1 月

関係各方面に報告書を送付し、活動のまとめを「なんでもドア」で報告した。次年度も継続することを確認して活動を終えた。

図3 活動を通じて思ったこと（生徒達の発言から）

- 世界の貧しい国の実態は、想像をこえるものだということが分かった
- 我々にとってほんの僅かなことで小さな命を救うことができることが分かった
- 有効な援助は、お金や物を送ればよいと言う単純な考えではいけないと分かった
- 人が幸福であることがどんなことなのか深く考えさせられた
- 援助とは、物を持って行くだけではダメで、どこにどのように配るか、一番必要な人のところはどこか、届けるにはどうしたらよいか、物をあげるだけでない援助とは何かを考えていかねばならないことがわかった。
- 援助で私腹を肥やす有力者、善意を悪用したり食べ物にする人も多いことがわかった。
- 世界の情勢政治や戦争について無関心ではいられなくなった。テレビ映像を見ていてもそこに映し出されない一般の人々はどのように生きているか考えるようになった。
- 活動を何年も継続している人たち、遺書を書いて決死の活動をしている人たちの存在を知った。
- 自分の少しの努力や我慢で、どこかで微笑む子どもがいることがわかった。
- 高校生でも何か行動することで動かせるものがあることがわかった。
- 新聞記事などで外部からも反応があり、小さな力でも心を通じさせることができると思った。
- 最初に見た夢は学校をつくることだったが、何十万円かで学校という入れ物はつくれても先生はどうするか、学校どころでない生活をしている子どもたちの問題、現実の厳しさを教えられた。

(4) 結果と考察

生徒たちの発想を具体化するに当たり、定例会で達成できそうな「短期的な目標」を取り上げ、目標を達成することで自信と活動方法が身に付く結果を得た。また、活動全体として一つの成果を得た（表1）。

議事録を回覧できるようにしたことで、活動を確認でき、新たな発想を得る結果となった。国際貢献ボランティア活動の取り組みが、生徒たちに夢を与える活動であったこと、国際人としての自分を確認することができたこと、さらに時代性に富んでいたことが相乗効果となり良い結果を得た。

最終の定例会で活動の感想を聞いた（図3）。助け合うことの素晴らしさ、無償で働くことの喜び、小さな発想から少しずつ形になっていくことの充実感、人の数の力が偉大なこと、マスコミの反響の大きなことなどが話された。

これらのことから、研究テーマである感性、社会性、主体性の伸長が確認でき、所期のねらいを十分に達成できたと考えられる。

また、小集団で生きる活動であった。活動の議事録は、次年度のマニュアルとして活用され、生徒たちに新しい試みを発想するための資料として成果を得た（図4）。今後は、生徒会の活動としての継続性や仕事量、ボランティア活動としての集団の大きさなどを検討していく必要がある。

写真1 高校の名札の付いた木を現地で植林



図4 今年度文化祭での新しい試み

- ・ NGO マザーランドアカデミー代表の現地マリでの活動報告の講演
- ・ チャリティーコンサート（音楽科、PTAと協力）
- ・ 他校との連携（5校）

6 部活動 -地域社会・異年齢集団とのかかわりを通して、生きる力をはぐくむ指導の工夫-

(1) ねらい

本研究のアンケート結果から、7割近くの生徒は、意見をだせる対象が身近な人間関係にとどまっている。また、生徒自身が学校生活の中で経験のないことや、自信のないことで、積極的に活動できない面がある。また、感動体験は、学年の上昇とともに増加しているが、感動できなかった生徒の理由の中には、「活動する場がなかった」、「一生懸命やる人がいなかった」という回答も増加している。

本校では、部活動に所属している生徒の数が年々減少してきている。また、生徒たちは、自分のやりたいことだけを行い、準備や片付けなどをできるだけ何もしないで済ませようと考える自己中心的な面がある。このため、部活動の運営面に支障をきたしている。部員としての自覚や、部全体や仲間の課題に対して意見を述べたり、話し合う関係が築けない状況があり、さらに、部員間の人間関係が希薄となり、ささいなことがきっかけで、部内で起こる仲間同士の喧嘩やいさかいを生んでいる。

このような現状の中で、一人一人の生徒が主体性や社会性をはぐくむためには、部員以外の多様な集団と一緒に活動する機会を増やし、「生かし生かされる」豊かな人間関係を築くことが大切である。

そこで、本事例では、次の3点をねらいとして実践を行った。

- ① 地域交流を推進し、多様な集団の中で活動する機会を増やし、感動体験を支援すること
- ② 自他の良いところに気付かせ、自信をもたせること
- ③ 集団活動の中で、集団の一員としての自覚をもたせるとともに、集団や他者に共感し、思いやりの心を育てること

(2) 対 象 硬式野球部 15名 (3年4名、2年6名、1年5名)

(3) 方 法

本校硬式野球部は、地域の小・中学生とその保護者など、地域社会との交流を図る目的で、「地域交流会」を組織し、スポーツ大会などを実施する。また、青少年地区委員会主催による「デイキャンプ事業」の1つであるTボール大会に、審判役員として運営面で参加する。

これらの活動を通して、学校の垣根を低くし、地域との情報交流を促進し、地域に開かれた学校づくりと、幼児から高齢者までの異年齢集団との活動を通して、上記3点のねらいを達成することを目指す。

その方法として、次に挙げる活動を繰り返し行う。そして、一人一人の生徒の内面的な変化・成長を援助し、豊かな人間関係を築くことを願い、実践研究を行う。(表1参照)

- ① 「地域交流会」「デイキャンプ事業」に関するアンケート調査の実施
- ② アンケート調査をもとにして、部内ミーティングの実施
- ③ 「地域交流会」「デイキャンプ事業」の実施
- ④ 反省会をもとにした部内ミーティングの実施

表 1 地域交流会及びデイキャンプ事業における生徒の活動と教師の支援

	生徒の活動		教師の支援
	地域交流会	デイキャンプ事業	
6月中旬	○部内ミーティング (スポーツ大会について)		○アンケートを実施し、地域との交流について生徒の意見をまとめ ミーティングに活用させる (表2参照)
7月下旬	○第1回スポーツ大会 Tボールの試合(小学生) 合同ミーティング(小学生) 地域懇談会後、感想文を書く		○生徒の主体性を尊重し、小学生の良い所をほめるよう助言する ○自分の考えや意見、感想を素直に多くの人の前で発表するよう助 言する ○活動の様子を写真に撮っておく
8月下旬	○合同ミーティング(小学生) 練習試合を応援に来た小学生か ら意見や感想を聞く		○スポーツ大会の時の生徒の感想文、写真を紹介し、相互に共感 し、きずなを深めるようにする
9月中旬		○Tボール大会審判打ち合わせ会議 主催者側やTボール公式審判員との 運営方法や、審判の役割についての 打ち合わせ	○会議の日時など、主催者側との連絡を密にとり、生徒と主催者側 との連絡調整を行う ○会議は、できるだけ生徒の言葉で話し合うように助言し、生徒の 主体的な参加意識を深める
9月下旬		○Tボール大会 Tボール公式審判員と協力して大会 審判を担当し、大会運営、試合進行 を行う エキジビションマッチを行う	○生徒の主体性を尊重し、公式審判員との協力で試合を進行するよ う支援する ○選手と楽しく、お互いの理解を深めて試合を進行するよう助言す る ○活動の様子を写真に撮っておく ○感想文にまとめさせる
10月上旬		○デイキャンプ実行委員会と懇談	○感想文、写真を紹介し、生徒の積極的な意見や感想を引き出し生 徒の活動が地域に貢献していることを気付かせる
10月中旬	○部内ミーティング スポーツ大会、Tボール大会を振り返る 今後の地域とのかかわりについて話し合う		○アンケートを実施し、地域との活動が自己を見つめ、他者とのか かわりにどう影響したか、考える場面を設定する (表3参照) ○地域より届いた感謝状を読み、地域との活動が、今後の部活動に どう生かされていくか話し合う機会を増やすよう助言する
11月下旬	○第2回スポーツ大会 シニアリーグとの野球の試合 中学生にバッティング指導を行う 地域懇談会後、感想文を書く		○生徒の主体性を尊重し、保護者、PTAの方々と協力して大会運 営、試合進行を考えるよう助言する ○中学生の良い所をほめ、足りない所を見つけ、伸ばすよう心がけ 楽しく、お互いの理解を深めて試合を進行するよう助言する
2月中旬		○Tボール大会 Tボール公式審判員と協力して大会 審判を担当し、大会運営、試合進行 を行う エキジビションマッチを行う	○前回の体験をもとに、大会役員としての自覚をもたせ、公式審判 員と協力して、試合進行を行い、主体的に大会を運営するよう助 言する ○選手と楽しく、お互いの理解を深めて試合を進行するよう助言す る
2月下旬	○部内ミーティング スポーツ大会、Tボール大会を振り返る 今後の地域とのかかわりについて話し合う 今後の部活動について話し合う		○アンケートを実施し、地域との活動を続けたことが、集団の一員 としての自覚にどう影響したか考える場面を設定する ○生徒相互のきずなを深め、部活動の運営面や仲間との課題に対して 主体的に話し合うよう助言する

(4) 地域社会・異年齢集団とのかかわりに関する生徒の反応と意識の変化

活動に当たっては、6月、10月に2回、部内ミーティングをおこない、生徒から活動前
(表2参照)、活動途中(表3参照)のアンケートをとった。

表 2 6月アンケート(活動前)

①部活動の楽しさについて書いてください
自分のクラス以外の人と一緒に野球ができるから。合宿でクラス以外の人と人間関係が深まり一緒にがんばれるから楽しい。
(2年 キャッチャー)
②小学生とのTボールの試合はどうですか
何のためにするのか意味が分からなかった。
(2年 ピッチャー)
③地域の人とスポーツをやったことがありますか
小学生の時にやったことがある。
(1年 マネージャー)

表 3 10月アンケート(活動途中)

①小学生や地域の方と活動してどうでしたか
楽しかった。意外と小学生や地域の人と交流できたこと、そして小学生や地域とみんなでスポーツで汗を流し、楽しくできたことがうれしかった。
(2年 キャッチャー)
②何か感動したことや考え方に変化はありましたか
小さい子供たちのプレイをみていたら、むちゃくちゃで、でも楽しそうにやっていて、「昔の自分もあんなだったんだろうなあ」と思い、懐かしかった。
(2年 ピッチャー)
③今後の部活動にどう役立つと思いますか
部員と一緒にやることで、みんなと話せるようになり、Tボールの時みたいに、大人に優しくされたように、私もみんなに優しくしようと思う気持ちをもったと思う。
(1年 マネージャー)

ア 6月アンケートの回答から

①では、「運動することが好き」「他のクラス、学年の人と話をすること」「みんなの手伝いができて楽しいし、マネージャーの仕事も楽しい」などの内容があった。

②では、「別に悪くない」「楽しそう」という回答もあった。ほとんどは、「意味がない」「関心がない」「嫌だ」と回答していた。

③では、「ない」と回答した生徒は、15名中12名だった。

イ 10月アンケートの回答から

①では、「はじめは嫌だなーと思ったが、意外と楽しかった」「みんなが楽しく一生懸命やっていた」「いい経験をした」などの回答があった。

②では、「何よりも助け合いながらやっていて感動した」「人との接し方の難しさを知った」などの回答があった。

③では、「部員同士話し合えるようになる」「自分のことばかり考えないで、他の人のことを考えたり、仲良くできるようにみんなが心がければいいと思う」などの回答があった。

(5) 小学生の感想

○高校生は強かったよ。友だちが高校生にホームランを打ってと言って、高校生はホームランを打ってくれたよ。それでアウトになったよ。僕は笑ったよ。楽しかったよ。

※) 特別ルールで生徒のホームランはアウトになる。 (小学1年生)

○チームを決めて、ルールを聞いて、Tボール大会がはじまりました。僕は、強くバットを振ったけど、あまり飛ばなかった。でも、お兄さんたちは、ホームランや強いヒットを打ってすごかったです。また、やって下さい。 (小学3年生)

○今日はTボールの試合をして下さってありがとうございました。いい思い出になりました。次回やるときは、ぜひ野球を教えて下さい。今度、僕たちの練習にも来て下さい。 (小学6年生)

(6) 結果と考察

本校の硬式野球部の生徒は、小学生との「地域交流会」でのスポーツ大会を契機に地域との交流を重ねてきた。日常の学校生活にない幅広い異年齢集団との活動は、生徒たちにとっては多くの感動を生んだ。この感動体験は、幼児から高齢者まで様々な人と触れ合ったことにある。さらに、学校では教わることの多い生徒が、地域社会の中で、小学生や中学生に野球を教えることの難しさや喜びを感じたり、また、審判員として主体的に大会を運営した成就感や自信を体得したことが大きく影響したと考えられる。生徒は、多様な集団の中で、様々な立場の自分を体験し、自らを見つめ、人との出会いによって感性が磨かれ、主体性、社会性を高めていく。この体験を通して、部員には、相互のきずなを深め、部活動の運営面や仲間の課題に対して、相手の考えを受け入れながら話し合う雰囲気が徐々に生まれた。自分が部の中でかけがえのない存在であることに気付き、仲間同士、支え励まし合う関係を築くことができた。

今後の部活動指導では、教員が、生徒に多様な集団で活動する機会を増やし、生徒の個性や能力を伸長させ、指導する立場から生徒の成長を願い、支援・援助することが重要である。

V まとめ

本年度の教育研究員特別活動部会は、「生きる力」をはぐくむためには、特別活動において、感性を涵養し、主体性と社会性を育成することが必要であると考えた。そして、この実現には、「生かし生かされる」体験活動が有効であるという仮説を立て、アンケート調査を実施し、以下の３点を提言として示した。

- 感性をはぐくむ感動体験を大切にするための指導の工夫
- 多様な集団活動の経験の中で、肯定的自己理解をさせ、自信をもたせる指導の工夫
- 生かし生かされる体験の中で、社会性と主体性を高める指導の工夫

そしてこれらの提言を踏まえて、次のように６つの実践研究を行った。

- | | |
|----------|---------------------------------------|
| ホームルーム活動 | 1.生きる力をはぐくむ文化祭指導の工夫 |
| | 2.年齢や就学目的が異なる集団の中で、生かし生かされる関係を作る指導工夫 |
| 学校行事 | 3.教科学習との関連を図った移動教室を通して、生きる力をはぐくむ指導の工夫 |
| 生徒会活動 | 4.文化祭運営指導を通して、生徒会役員のリーダーシップ育成の工夫 |
| | 5.ボランティア活動を通じ、生きる力をはぐくむ指導の工夫 |
| 部活動 | 6.地域社会・異年齢集団とのかかわりを通して、生きる力をはぐくむ指導の工夫 |

実践を通して、「生きる力」を育成するためには「生かし生かされる」体験が有効であることが裏付けられた。そこで、「生かし生かされる」体験を実現するために必要な観点を以下に示す。

- ① 感動体験を積み重ねさせ、感性を涵養させること
- ② 自己の多面性や持ち味を発見できるような多様な集団活動の機会を設定すること
- ③ 活動のやる気を出させ、共に活動する喜びや達成感を味わわせること
- ④ 活動に「ゆとり」をもたせ、互いに認め合う気持ちをもたせる中で自信を育てること
- ⑤ 集団の中で存在感や充実感を感じさせ、集団の一員としての意識や責任感を高めること
- ⑥ 開かれた学校づくりを推進し、地域社会や校外の諸団体との連携を積極的に行うこと
- ⑦ さまざまな立場から生徒を褒めるなど、教員の協力体制を充実させること

「学校週５日制」の完全実施を目前に控え、また、学習指導要領の改訂に伴い、「行事の厳選」や新設される「総合的な学習の時間」の論議が高まっている。このような中、「生きる力」の育成を目指す特別活動の在り方も「不易と流行」を踏まえた論議を積み重ねる必要がある。本年度の教育研究員特別活動部会は、その視点の一つとして、「生かし、生かされる」体験活動の重要性を提示した。特別活動の領域は、感性を涵養し、主体性や社会性を育成するにふさわしい集団活動の場である。「行事の厳選」による教育効果の質的な低下を防ぎ、新設される「総合的な学習の時間」をより有効なものにするため、本研究の提示した「生かし生かされる」体験活動の重要性が今後の実践に資することを期待しまとめとする。